様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３８０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６６３

研究課題名（和文）対話を通した第二言語ライティング能力の育成

研究課題名（英文）Development of second language writing skills through dialogue

研究代表者
谷口　正昭（TANIGUCHI, MASAAKI）

静岡産業大学・情報学部・教授

研究者番号：６０５３３２１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：1.ライティングセンターとは、添削による文章指導を行わず、指導者との対話を通して学生の自主的な学びを促す支援機関であるが、米国における第二言語のライティング教育が、どのような段階を経て発展してきたかを、先行研究資料、参考文献、関連書籍によってまとめた。
2.留学生に対する「対話」を用いた文章指導の有効性を検証するため、ライティングセンターにおける個別指導を観察、記録し、分析を行った。また、事後のインタビューにより、当事者においては、どのような「気づき」が喚起されたか、どのような問題を抱えているかについて確認し、指導上の留意点をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の調査結果から、留学生の多くは、構文や語彙の正確さを向上させる目的でライティングセンターを利用しており、「対話」を重視するライティングセンターの指導方法を認めつつも、添削指導が行われないことへの不安や不満を抱えていることが示唆された。また、母国において受けた文章作成指導とは、指導方法がかなり異なることから、センターの利用に心理的な抵抗を感じている学生も見られた。今後更に増加するであろうと予測されるライティングセンターの運営方法に関して、有意義な知見が得られたものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：1. A writing center is an educational institution that encourages students to learn spontaneously through dialogue with instructors without correcting sentences. The researchers summarized the stages in which writing education in the second language has developed in the United States, based on previous studies, reference materials, and related books.
2.In order to verify the effectiveness of writing instruction using "dialogue" for international students, individual instruction at writing centers was observed, recorded and analyzed. In addition, follow-up interviews were conducted to confirm what type of "notice" the learners had and what problems they had, and to summarize points to be noted in writing instructions.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育　ライティングセンター　アカデミックライティング　日本語教授法　留学生　第二言語習得

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、申請者が日本語予備教育機関から大学に職を移した際、日本語によって学術的な文章を書く技術が不足し、学問を遂行する上で大きな困難を抱えている留学生が多数存在するという実態に直面したことから想起された課題である。高等教育機関で学ぶ者にとって、学術的な文章を書く技能の習得は必須であり、これは留学生においても例外ではない。大学や大学院で学ぶ留学生は、日本人学生と同様に、レポートや論文など、学問研究に携わるあらゆる場面で「学術的な文章を書く」という作業が要求される。

（２）米国において、人種による教育格差や移民問題に端を発した深刻な学力低下現象が顕在化してから半世紀以上になるが、大学をはじめとする高等教育機関は、70 年代後半、基礎的なリテラシー能力に欠ける学生の処遇を問題視し、その具体的な対策として、学術的な文章を書く技能の向上を主な目的とする「ライティングセンター」を設立した。この学習支援組織は、英語を母語としない留学生にも広く開かれた機構となっている。ライティングセンターとは、専門的な知識をもつチューターや大学院生などの指導員が、学生の文章作成に対して個別指導を行う機関である。指導員の役割は、あくまでも援助者という立場に徹しながら、書き手自身が自ら論理的な文章を書く力をつけられるよう、「対話」を通して支援を行うことであり、通常は文章の添削・校正などは行わない。機関ごとに異なるが、学習者はインターネットなどを介した予約システムを利用し、30 分～60 分の個別指導を受ける。現在では、アメリカやカナダのほぼすべての大学に、このような機構が設置され、チュートリアルやネット上の支援などを通して、アカデミックライティングに関する諸問題についての指導を受けることが可能となっている。北米においては広く普及しているライティングセンターであるが、日本国内では、ようやく十数校が、第二言語としての英語ライティング指導に主眼を置いた支援体制の導入を開始した段階にある。また、国内の日本語ライティングセンターは、日本語母語話者を主な対象としており、レポートや課題論文、就職用小論文、履歴書、各種手紙文の「文章添削」を支援内容の中心に据えている機関が多い。しかし、ライティングセンターの目指すものが、「優れた文章」の作成ではなく「優れた書き手」の育成であることを考慮すれば、単に「添削指導」を繰り返すだけでは、その目的は果たせない。アカデミックライティングにおいては、思考を体系的に、かつ論理的、分析的に表現するための文章作成技術を育成しなければならず、その指導法も、指導者との「対話」を通して、文章作成能力を内発的に高められるように配慮するなど、特化されるべきであるが、我が国においては、このような支援体制はまだ萌芽期にあり、その必要性に対する認識も希薄である。

２．研究の目的

半世紀近い歴史を有する米国のライティングセンターにおいては、既にその指導法が確立されており、既成モデルの提示など、ドラフト作成の過程において一時的な支援を行う scaffolding（足場づくり）といった「書く過程に重点を置いたプロセス・アプローチ」が広く用いられている。米国においては、ライティングセンターの役割や意義、アカデミックライティングの指導法等を論じた先行研究が多数見られるが、我が国では、上述の英語ライティングセンターやチューターの育成に関する基礎研究がわずかに存在するのみである。

第二言語におけるライティングの教育観や指導法についても、米国においては様々な論争があり、指導法に関しても多くの実践報告がなされている。しかし、国内では第二言語におけるアカデミックライティングに関する指導法の研究は遅れていると言わざるを得ない。

本研究では、米国におけるライティングセンターの指導方法が、どのような変遷をたどってきたか、特に第二言語習得者に対する文章作成指導はどのように行われてきたのかについて概観する。また、国内における既存のラインティングセンターについての調査成果を踏まえた上で、留学生に対して実際に行われている文章作成指導を観察、分析し、留学生に対する「対話」によるライティング指導のあり方の問題点について考察することを目的とした。

３．研究の方法

（１）第二言語におけるライティング教育が、どのような段階を経て発展してきたのかを具体的な指導法と併せて先行研究、関連書籍等からまとめ、ライティング指導の具体的な手法について考察した。

60 年代以降、大学生の文章表現能力の低下が問題視されるようになった米国では、従来の教育システムのあり方を捉え直し、第一言語におけるライティング教育と連動する形で、移民の子弟や留学生など、第二言語学習者を対象とした学習支援を行ってきた。米国においては、第二言語学習者に対してどのような表現能力の育成指導がなされてきたのか、どのような段階を経て指導法が発展してきたのかを、先行研究資料、参考文献、関連書籍の収集等によってまとめた。

（２）日本の高等教育機関に設置されたライティングセンターを利用する留学生を対象とした半構造化面接を行い、留学生が学術的な文章を作成する際に、どのような課題を抱え、どういった解決方法を見出しているのかを、木下（2003）の修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（以下 M-GTA）を用いて分析した。インタビュー時間はいずれも、１時間程度であり、協力者の同意のもと、IC レコーダーに録音した。データはすべて文字化し、研究課題に関連する箇所に着目した上で、複数の類似した具体例を同定し、分析の最小単位である「概念」を生成し

た。それらの概念を包括的に説明できる「概念名」を、その定義も含めて生成した上で、概念同士の関係性を見出す「カテゴリー」を設定し、グループ化を行った。さらに、カテゴリー間の関係性を考察して現象（本研究では、書き手である留学生の意識や行動）を構成するストーリーラインを導き出した。留学生はなぜ、日本語による文章作成指導が受けられる教育支援機関を頻繁に利用しないのだろうか、という漠然とした問いに始まり、彼らが日本語で学術的な文章を書く際、どのような問題を抱え、どういった方略をとり、どのような支援体制を望んでいるのか、という問いを設定し、研究を行った。

４．研究成果

（１）米国における第二言語におけるライティング教育が、どのような段階を経て発展してきたかについて、先行研究資料、参考文献、関連書籍によってライティングセンターの理念、具体的な指導法の変化等を考察し、その変遷を論文として発表した。

（２）ライティングセンターを利用する留学生を対象とした調査からは、以下のことが明らかとなった。

① 調査対象となった留学生の多くが、文章を作成する際、内容、全体的な構造、導入部分や結論部分の書き方といったマクロ的側面に困難を感じていることが明らかになった。一方で調査協力者は、学術的な文章の優れた書き手となるために、高度な語彙や文法、構文を運用する必要性を感じており、ライティングセンターのチュートリアルにおいて、文法や語彙等の誤りの修正も期待しているという結果が得られた。

② 文章作成における課題の解決方法としては、ライティングセンターを活用するほか、身近な人に相談する、インターネットで検索する、スマートフォンのアプリや機械翻訳を利用するといった手法、SNS を用いて不特定多数に質問を投げかけ、回答を得る、といったものが見られた。

③ 調査協力者はライティングセンターの利用に対しては心理的抵抗を感じていた。ライティングセンターでは、プロダクト（完成原稿）ではなく、プロセスを重視し、「対話」に基づいた指導が行われるが、これは、留学生の多くが母国で受けてきた添削指導や、「教師は目上の立場にあり、生徒に知識を与えるものである」といった既成概念とは相反するものである。また、日本語学校等での予備教育におけるライティング指導も、その多くが従来の添削指導に終始しており、その評価も完成原稿を判定するものである。さらに、調査対象となった留学生の場合は、母国においてすでに何らかのかたちでライティングに関する指導を受けて来日していることが多く、日本のライティングセンターにおける指導スタイルと、かつて受けてきた指導方法との相違が、不安やとまどいを生んでいた。それは、主に文法や語彙など、言語形式の正確さが重視されてきたことに起因しているが、「対話」に基づいた文章作成指導においては、上記のような点を考慮し、留学生の不安や不満をできるだけ解消する方向で丁寧に指導を進める必要があることが示唆された。

　通常ライティングセンターでは、語彙や文法等の修正は行わない方向で運営がなされるが、調査結果をふまえると、そこにはより柔軟な対応が必要となる。また、「対話」を通した文章作成指導においては、それ自体がロールモデルとして機能するような質の高い文章に多く触れさせることの重要性が確認された。そのことによって、学習者自身が書き手となった際に、目標を設定し、継続的な問題解決を行いながら、文章作成にあたることが可能となることが観察された。EAP（English for Academic Purposes）を例にとると、優れた論文（査読付きの主要な学会誌に掲載された論文であれば、形式、内容ともに一定の水準を保っていると言える。）を数多く読ませることで、学術的な文章にふさわしいレトリックや複雑な構文、論理的な文章の展開を学び、書き手として自身のプロダクトに生かすことができるようになる。そのためには、まず指導員（チューター）が、学習者の習熟度や専門分野を考慮した上で「優れた文章」の提示を行う必要がある。目標言語の能力が発展途上である学習者の場合、どのような文章が良質のものであるかという判断が難しいことがあり、指導員の的確な助言が重要となる。また、実際に文章を読んだ上で、統語、レトリックといったレベルでの様々な要素やパラグラフが持つ機能について、指導員との「対話」を通して考えさせるというチュートリアルも有効である。文章構成の一つの手法として、「背景知識を読み手と共有する」→「研究の必要性を述べる」→「当該研究の取る立場や考えを述べる」→「包括的な目標を示す」という４段階があることを学習者に提示し、サンプルとなる文章を「対話」を通して分析する。まず、読み手としてテキストに能動的に関わり、その内容や情報を正確に理解しながら分析をしていくことが、第二言語学習者が優れた文章を組み立てていく上で有効な方法であることが明らかとなった。

　わが国の高等機関に学ぶ日本語学習者の「書く」という言語運用能力の伸長のためには、日本語におけるライティング教育やその支援体制がどうあるべきか、更なる調査、研究が必要である。上記の知見を礎としながら、引き続き有効な文章作成指導の方法を模索し、論じていくことを今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 谷口正昭、谷口ジョイ、「日本語アカデミックライティングにおける課題－留学生の視点か

ら　Difficulties with Academic Writing：Perspectives from International Students」、『静岡産業大学情報学部研究紀要』21 号 、査読有、31－44

〔学会発表〕（計２件）

① 谷口正昭、谷口ジョイ、「『対話』を重視した日本語アカデミックライティングの指導における課題－非漢字圏出身の留学生の視点から」、The 4th Angkor Wat International Conference on Japanese Language Education 第 4 回アンコールワット国際日本語教育セミナー（於カンボジア　メコン大学）、2018 年

② 谷口正昭、谷口ジョイ、「Difficulties with Academic Writing：Perspectives from International Students（日本語アカデミックライティングにおける課題－留学生の視点から）」、The 15th International Conference on Japanese Language Education in Malaysia 第 15 回マレーシア日本語教育国際研究発表会（於マレーシア　マラヤ大学）、2018 年

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：谷口ジョイ

ローマ字氏名（TANIGUCHI，joy）

所属研究機関名：静岡英和学院大学

部局名：人間社会学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：80739201

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。